



# 障害の重い子どもの 発達と生活

著者  
**細渕 富夫**

どんなに障害が重くても「心の中で何を感じ、何を思っているのだろうか」と子どもに寄り添うことから始めたい。その第一歩は、子どもを理解するための基礎的なことから一緒に学ぶことではないでしょうか。

## 第1部 重い障害のある子どもを理解する

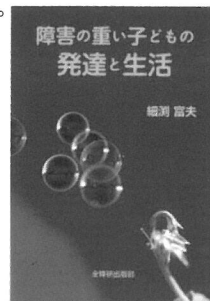
1 重い障害のある子どもの基礎的理解 / 2 コミュニケーションの基盤をつくる / 3 コミュニケーション欲求を育む 関係発達論を越えて / 4 超重症児の内面世界 1 / 5 超重症児の内面世界 2

## 第2部 重い障害のある子どものいのちを守る

6 重症児療育のあゆみ / 7 重症児のいのちを守る / 8 出生前診断と豊かな社会 / 9 いのちの思想を深める

## 第3部 重い障害のある子どもと家族の生活を支える

10 新生児医療の現場から / 11 家族を支える在宅移行支援 / 12 医療的ケア児を支える / 13 超重症児とその家族の成長



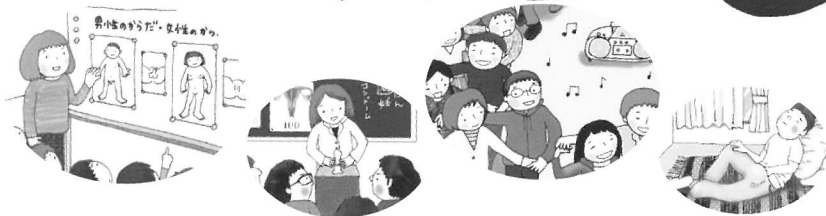
本体 1,700 円 + 税

全障研出版部

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-15-10 4階  
TEL: 03-5285-2601 FAX: 03-5285-2603 <http://www.nginet.or.jp>

障害のある子ども・若者の性教育や性の支援の課題に迫り、セクシュアリティの教育や支援のあり方を考える一冊

# ゼロから学ぶ 障害のある子ども若者の セクシュアリティ



日本福祉大学

伊藤修毅 著

本体 1800 円 + 税

●セクシュアリティに肯定的に向き合う ●セクシュアリティの多様性 ●私のからだは私のもの ●距離感ではなくふれあい ●ふれあいの実践に学ぶ ●マスターベーション ●恋愛・結婚などの権利と学び ●セックスのはなし ●セックスワークと障害者 ●性教育バッシングを乗り越え ●障害の重い人たちへのセクシュアリティ教育 ●障害者権利条約とセクシュアリティ ●国際セクシュアリティ教育ガイダンス

全障研出版部

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-15-10 西早稲田関口ビル 4F  
TEL. 03-5285-2601 FAX. 03-5285-2603 [www.nginet.or.jp](http://www.nginet.or.jp)



## 「9歳の節」と発達保障

特集にあたって

白石正久

『障害者問題研究』は、「1歳半の節」と発達保障（44巻2号）、「4歳の節」と発達保障（46巻2号）の特集を刊行してきた。今回の「9歳の節」と発達保障は、その第3弾である。

「1歳半の節」と「4歳の節」、今回の特集に含まれる「7歳の節」は幼児期の発達の階層に存在する3つの段階（質的転換期）とされる。1950年代から60年代にかけて、知的障害児入所施設・滋賀県立近江学園での田中昌人（後に京都大学全障研初代委員長）らによる発達研究と実践によって提起された。さらに田中は、学童期への質的転換期「9歳の節」や乳児期の発達の階層と段階を明らかにし、「可逆操作の高次化における階層-段階理論」として体系化した。なお、発達の「段階」「質的転換期」「節」などは、異同も含めて共有可能な概念として検討されるべきだが、ここではほぼ等しいものとして扱うことにする。

川地亜弥子論文で述べられるが、「9歳の壁」という表現は、60年代中頃の聴覚障害児教育において、言語による抽象的思考の困難などが指摘され、「9歳レベルの峠」とされたことに始まる。「学力遅進」児が増加する小学校3、4年生の実態などを重ねて、「9歳の壁」と表現するようになった。

このように発達の質的転換期は、障害のある子どもへの実践と発達研究を一つの経路として提案されたが、通常の教育においても、共通・普遍なものとして認識されてきた経過がある。

脇中起余子論文の聴覚障害、別府哲論文の自閉スペクトラム症など、障害に起因する質的転換期の発達連関の特殊性は、「発達の節」特集の一貫

するテーマである。社会的諸関係のなかで、子どももこの特殊性を異質さとして感知、認識して、自己内でのさまざまな心理的反応を経験する。

こういった特殊性を、普遍性との区別や差異においてのみ認識するのではなく、普遍的な発達過程への統合へ向かう変化の事実を明らかにしてきたのも発達保障の観点での実践と発達研究である。

発達の質的転換の困難や特殊性は、教育・生活との相互関係によって変化していく。また、学力遅進や学力構造の差異などは、教育・生活を主たる規定因として認識される。それほどに教育の役割は大きい。

しかし、子どもの内的条件としての発達の質的転換のメカニズム、その原動力の生成についての解明が不十分では、能力と人格の発達は、教育によっていかようにも達成されるという教育一元論を招くことになりそう。事実、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「教科道徳」の目標など、「拘束力」をもって提示されているものには、この発達の質的転換過程への留意は乏しい。

思考・操作、書きことばの発達の基礎、自己概念と他者概念の相互関係などの諸側面の連関と発達の變化に視野を広げ、質的転換を時間的断面としてではなく、その原動力の生成過程とみる見通しをもった発達研究が求められている。そういった認識を基盤にして、一人ひとりの子どもの発達困難への再教育過程を仮説し実践していくこともできよう。本書に掲載された実践報告も、発達と教育、発達理論と実践の往還関係を認識する手がかりになりそう。

(しらいし まさひさ)